

# 英語と日本語の「時制・相」について

宗宮喜代子

本稿では、英語と日本語の時制と相に関する言語事象を観察して、これらが両言語の性質の違いをどのように反映しているか考察する。まず、「時制」と「相」が文法範疇として両言語に存在すると想定してこれらを定義する。その上で、時制と相が各々の言語体系中で見せる機能の違いが、英語と日本語の世界観の違いに対応することを論じる。

## 1. 「文法範疇」について

人は生きる上で誰でも時間を経験する。昨日が今日になり、まもなく明日になることを誰でも知っている。言語によっては「時間」「昨日」「今日」「明日」という概念を備えていないかもしれない。それでも、時間の中を生きることは人間の普遍的な経験だ。

そんな時間の経験は、言語の中で何らかの形で表現されることだろう。英語では、動詞形態（例：eat-ate-eaten-eating）、時の副詞（yesterday, once, at 5: 00 pm）、従属節（before/after he comes home）、形容詞（previous, next）、名詞（ancestor, beginning）、文全体、などの言語範疇が時間のさまざまな側面に言及する。日本語でも同様だ。

時間のさまざまな側面のうち、英語でも日本語でも、時制と相は文法範疇として認められる。つまり「時制」と「相」の概念には心理的実在性があり、これらを使って文法を語ると分かりやすいため、名前をつけて語ろうということだ。

ところで「文法範疇」という用語には曖昧性が内在する。時制と相は文法範疇である、と言う時には、文法範疇とは言語体系の中にあって言語表現によって表されたり指示されたりするものである。一方、言語範疇には語彙範疇と文法範疇がある、などと言う時の文法範疇とは個々の機能語、形態素など、表す側のものだ。

言い換えれば、時制や相という文法範疇が、動詞の屈折語尾である-ed や-ing という文法範疇によって表される、云々という話になる。これでは紛らわしいので、これ以降は「文法範疇」という用語を避けて「時制」「相」「動詞形態」「-ed」「-ing」などの用語を使うことにする。

## 2. 「時制」とは

時制については、英語学と日本語学の一般的見解で一様に「直接指示的」と定義されている。代表的なコムリーのことばを引用する（B. Comrie 1985: 14）。

A system which relates entities to a reference point is termed a deictic system, and we can therefore say that tense is deictic.

本稿でも、英語と日本語の両方に対してこの考えを適用する。さらに、deictic（直接指示的）ということばが言い尽くしているように、時制は話者と相対的に決まるところから、コムリーの reference point（基準点）の部分をもより明確にして、次のように定義する。

時制は、動詞形態が表すところの、1つのできごとの時間的位置である。  
この時間的位置は発話の時点を基準にして決まる。

この定義によれば、時制の一致も含めて、発話時以外の基準時は存在しない。ただし、これ以降は便宜的に、ライヘンバック (E. Reichenbach 1947) に由来する「発話時 (speech time)」、  
「基準時 (reference time)」、  
「できごと時 (event time)」という用語も使用する。

## 2.1. 英語の時制

英語の時制には、現在時制と過去時制がある。現在時制は無標 (unmarked) であり、無時間のことがらを表す時にも用いる。時制は動詞形態に組み込まれているため、何らかの時制を表さないことには文が成り立たないからである。現在時制だからと言って、「太陽は東から昇る」や「 $5+7=12$ 」などが今現在に限った事態を述べているわけではない。

通常、現在時制は話者のいる時間を指す。話者のいる時間は今この瞬間、あるいは幅のある時間帯として捉えられる。あるできごとを現在時制で表すかどうかは話者に任せられる面もあるが、たいていは文脈から決まる。また、時を表す副詞を使う場合には、today, now は現在時制と、yesterday は過去時制と共に使わなければならない等、語彙には文の時制を決定する力がある。

英語では、過去時制は定冠詞 the に似ていると言われる。ホフマン&影山 (1986) は、定冠詞 the が “Is the identity known and important?” という基準で用いられるように、過去時制は “Is the time known and important?” という基準で決まると言う (Th. R. Hofmann & 影山太郎: 83)。つまりは過去のできごと時が特定されており、なおかつその時点が重要である場合に過去形を用いる。

それ以外では、いわゆる現在完了形として、実際には過去に起きたことでも現在時制で表すことになる。現実の時間と言語の時制とは必ずしも一致しないのだ。過去時制は、条件が満たされた時にのみ用いる有標の時制である。

本稿では、「動詞形態が表すところの」という定義から、英語には未来時制は存在しないと考える。法助動詞で未来を表す場合は現在時制である。ただし、時制の一致によって法助動詞の「過去形」に相当する形が用いられる場合はある。ちなみにデイクソンは、...in modern English modals have no past tense forms (現代英語では法助動詞に過去形はない) と明言している (R. M. W. Dixon: 224)。

英語の 2 時制をまとめるとこうなる。

#### 現在時制

- 無時間 (1) Mathematics is the science of numbers and shapes.  
 現在の瞬間 (2) I (hereby/now) pronounce you man and wife.  
 幅のある現在 (3) It is hot (today).  
 (4) John goes to college.  
 (5) He is living in New York.  
 (6) He has been living in New York for 10 years.  
 (7) Oil prices have been rising recently/ since last month.  
 (8) He has lived in New York. (彼は N. Y. に住んだことがある)  
 (9) The ice has melted. (氷が解けた)  
 (10) He is leaving for New York (tomorrow). (彼は (明日) N. Y. に  
 発つ)  
 (11) It will/ may rain tomorrow.  
 (12) Could you help me with the baggage?

#### 過去時制

- (13) John left (yesterday).  
 (14) He had finished his homework before I even offered to help.  
 (15) It was hot (yesterday).  
 (16) He was playing tennis when I called him.

上の例のうち、例えば現在時制の(8)He has lived in New York は、「彼」は過去のある期間 N. Y. に住んだが、この先また引っ越して N. Y. に住むかもしれないという話者の心情を表している。主語が既に死亡しているなら過去形にするとところだ。

(9)の The ice has melted は、氷が解けたばかりで目の前で水になっているような時に言う。

現在が過去を引きずっている状態だ。また、(10)の *He is leaving for New York (tomorrow)* は、出発の準備がすでに始まっていることを現在時制で表している。出発の準備というのは話者の主観で決まり、心の準備でも良い。出発がまだ始まっていないと思えば、法助動詞を使って *He will leave....* とするところだ。こちらは現在の予測を表す表現である。

上の例でも明らかなように、現在時制は多種多様な現在の事態を表現する。現在時制が表す現在がどんな時間であるのかは、動詞の語彙的意味から分かることもあれば、*have -ed*, *be -ing*, あるいは法助動詞が表すこともある。いずれにせよ重要なのは、現在時制では話者の視点ができごとの内側にあることだ。できごとはすでに始まっており、まだ終わっていない。話者の視野は自分のいる現在に限定される。なお、本稿では、物語の中で臨場感を出すために使われるいわゆる劇的現在や、新聞の見出し、あるいはスポーツ実況で使われる *Nakada shoots. It's a goal.* などの現在時制には特に言及しないが、これらも現在時制の特徴を備えていることに変わりはない。

過去時制の方は、多種多様な過去の事態というよりは一様に、終了し幕がおろされた事態を表現する。過去時制に関しては、発話時から見て特定の過去の時間が念頭にあることが重要だ。それにより時間軸上の位置が決まる。瞬間であれ幅のある時間であれ、話者は自分の外側にあるできごとを一掴みにして「あの時」と指示する。

2つの時制の違いをよく示す例をディクソンから挙げる (Dixon: 220)。

(17) *The police have arrested the criminal.*

(18) *The police arrested the criminal (but he later escaped from them).*

いわゆる現在完了形の文では、犯人は捕まって現在も身柄を拘束されている。一方、過去形の文は、犯人の逮捕を終結した過去のこととして描いている。このため、掴まえたが逃げられた、という場合には是非とも *arrested* の部分に過去時制を使わねばならない。

英語の時制を表にすると次の通りである。

表1 英語の時制

現在時制	過去時制
V	V-ed

英語の時制について本稿で注目するのは、過去時制の文における「時制の一致」の現象と、認識用法の法助動詞の文に共通点が見られることだ。

(19-a) Mary said, "I have seen a gryphon."

(19-b) Mary said, "I saw a gryphon."

(19-c) Mary said that she had seen a gryphon.

(20-a) Jane has seen a gryphon.

(20-b) Jane saw a gryphon.

(20-c) Jane must have seen a gryphon.

一つめの例では、I have seen a gryphon と I saw a gryphon という単文で現在時制と過去時制が原則に基づいて対立するのに対して、過去時制の複文の従属節の中では時制が曖昧になっている。つまり、基準時が過去の時には、できごと時が基準時と相対的に過去かどうかが見えなくなる。

二つめの例では、法助動詞を用いない 2 文はやはり時制の違いを表しているが、法助動詞 must を使った文では時制の違いが見えない。この文は現在時制であり、発話時を基準としているのだが、法助動詞によって話者の認識の世界が導入されている。当該のできごとは話者の認識の世界でのできごと、ということになる。

2 つの例は、過去と認識世界がどちらも非現実世界であることを示唆している。過去は非現在という意味で非現実であり、認識世界は話者の心の中という非現実である。話者は常に現在の客観世界という現実にも身を置いており、非現実世界とは一線を画している。このため一つめの例では、過去という遠い世界のできごとの時間関係が曖昧になる。二つめの例では、認識世界という遠い世界のできごとの時間関係が曖昧になる。

このことは、話者が発話時から動かないことを示唆する。英語では、話者の視点が固定している。話者は、現実の現在という視点から遠近法的に過去あるいは心の中を眺める。

このように考えると、仮定法と「婉曲の過去形」の動機づけが可能になる。

(21) I suggest that his name (should) be deleted from the list immediately.

(22) I wish I knew the answer.

(23) It's time we went to see him in the hospital.

(24) I wish I hadn't met him.

(25) I wanted to ask you if you can come to help us.

(26) I was wondering if I can borrow your car tomorrow.

仮定法は、従属節の表すできごとが非現実世界に属することを表すための動詞形態の体系である。このうち仮定法現在では、できごとが近未来であることをイギリス英語では一般的に法助動詞 *should* で、アメリカ英語では動詞原形で表す。*should* は認識世界を導入する。動詞原形の方は命令法と同じ形態であり、これもまた認識世界を導入する。一方、仮定法過去と仮定法過去完了は、現実の時間軸にとどまりながら、動詞形態を本来の時制から外すやり方である。このように3種類の仮定法はどれも、できごとをその本来の時間から外すという共通点をもっている。そうやって非現実性を表している。

本来の時制が現在時制である時には、これを外して過去時制にすることで婉曲さを伝えることもできる。これも過去という時間の非現実性を利用した慣習である。上の例のうち *I wanted ...* と *I was wondering...* がこれに当たる。その他、(28)の *would* のように、法助動詞の「過去形」を用いて婉曲を表すこともできる。

(27) Will you lend me your car tomorrow?

(28) Would you lend me your car tomorrow?

現代英語では *would* は過去時制ではなく現在時制を表すのだが、以前は過去時制を表していた。このためか現代でも *would* は時制の一致で用いられる。この「過去形らしさ」が「非現実らしさ」に通じ、非現実のもつ距離感が婉曲な感じに通じると思われる。

## 2.2. 日本語の時制

では日本語の時制を見てみよう。先の定義に従えば、日本語にも現在時制と過去時制の2つがある。このうち現在時制が、無時間、発話行為の現在の瞬間、幅のある時間を表すことも英語と同様である。時を表す副詞も存在する。

(29) 数学は数と形の科学だ

(30) 大会の開会を宣言します

(31) ドキドキする//今も朝鮮語が分かる//今は困る

(32) あの時はドキドキした/\*あの時はドキドキする

(33) 昔は朝鮮語が分かった/\*昔は朝鮮語が分かる

(34) あの時は困った/\*あの時は困る

(35) 今はもう気分が良い/\*今はもう気分が良かった

(36) 昨日, 病院に行った/\*昨日, 病院に行く

(29)と(30)はそれぞれ, 無時間のことがらと発話行為を現在時制で表している。(31)~(36)は, 基本的に「する」型で現在時制を表し, 「した」型で過去時制を表しており, 日本語でも英語と同様に2つの時制を設定するのが妥当である。

表 2 日本語の時制

現在時制	過去時制
する	した

しかし, 「ドキドキする」「分かる」「困る」など主観的なできごとを表す動詞を別にすると, 日本語の過去時制は容易に現在時制にシフトする。そのことは, 時を表す副詞が同じ文の中に存在しても関係ない。この意味で日本語の過去時制は弱い概念であると言える。ただし, 過去時制が現在時制にシフトするのは, 「ている」形にのみである。

(37) あの時はドキドキした/\*あの時はドキドキしている

(38) 昔は朝鮮語が分かった/\*昔は朝鮮語が分かっている

(39) あの時は困った/\*あの時は困っている

(40) 彼は昨日, 病院に行った/ 行っている

(41) 彼は(昨年) 大学を卒業した/ 卒業している

(42) 昨日ご飯を食べたか——食べた/食べなかった/食べている/食べていない

「している」を相の種類と考えれば謎が解ける。日本語では時制と相が緊密に結びついているようだ。相については次節を待つとして, ここでは, 日本語では主観的なできごとを表す動詞類が存在すること, およびこの種の「主観動詞」を除いては, 過去の特定の時間のできごとが過去時制で表されるか, あるいは現在時制の「している」という相で表されることを確認しておく。

もう一つ日本語の時制に関して興味深いのは, いわゆる相対時制である。ちなみに英語でも, 発話時でなく過去のある時点を基準時とするという意味で時制の一致の現象を相対時制と呼ぶ向きがあるが, 本稿では先に見た通り, 英語では時制の一致の場合も発話時が基準になってい

と考えているため、「相対時制」という用語は日本語に限定する。むしろ英語は絶対時制だと言うのが本稿の主旨である。

- (43) ご飯を食べる前に/\*食べた前に手を洗った
- (44) ご飯を食べたあとで/\*食べるあとで薬を飲みなさい
- (45) 昨日家を出る時/出た時、悪い予感がした
- (46) 彼に会ったらよろしく言ってくれ
- (47) 彼に会うなら伝言を頼みたい

日本語の文では、主節の動詞のみが、発話時を基準とした時制を表す。上の例では、「洗った」と「した」が過去時制、「飲む」「言う」「頼む」が現在時制を表している。一方、従属節の動詞は主節の時制に関係なく、2つの節の中の動詞が表す2つのできごとの時間的順序を反映する。時間に関するこのような情報を相対時制と呼ぶ。相対時制においては、話者の視点は発話時を離れ、二つのできごとに移動する。本稿の定義では、このような「相対時制」は時制ではない。ただ、その名前と呼ばれる言語事実は確かに存在する。

上の5文のうち特に(45)を例にとると、「家を出る時」の方は家を出るか出ないかの時に悪い予感がしたと言っており、「家を出た時」の方は家を出た直後に悪い予感がしたと言っている。どちらも、2つのできごとのうち時間的に早い方を過去時制に準じる「した」型で表し、遅い方を現在時制に準じる「する」型で表している。その他の例文についても同様である。

過去時制が弱いことと相対時制が存在することは日本語の時制の特徴である。英語と日本語はどちらも現在と過去の2時制をもつが、それぞれの言語体系中での時制の働き方、ひいては時間の捉え方はずいぶん違っていることが分かる。

### 3. 「相」とは

相についても、定義の上では英語学と日本語学の一般的見解は一致している。代表的なコミュニーのことは引用する (B. Comrie 1985: 14).

...aspect is non-deictic, since description of the internal temporal constituency of a situation is quite independent of its relation to any other time point.

本稿でも、英語と日本語の両方に対してこの考えを適用して、相を次のように定義する。



相とは、動詞形態が表すところの、1つのできごとの時間的性質である。

この定義から、相が時制よりも複雑な概念であることが推測できる。まず、時間的性質とは具体的にどのようなことか曖昧だ。できごとの始まり、進行、完了、継続、習慣、繰り返し、瞬間、状態など、さまざまな「時間的性質」が想像される。さらに、これらの時間的性質は、動詞の語彙的意味によっても変異するだろう。

そこでまず、相を形式に基づいて分類し、次に語彙的相 (lexical aspect; Aktionsarten) を考慮して分析する。

### 3.1. 英語の相

英語では、相の形式的意味はきれいな相補分布を見せ、時制とも整合している。

表 3 英語の相

	現在時制	過去時制
単純相	V	V-ed
進行相	is -ing	was -ing
完了相	has V-ed	had V-ed

単純相はできごとを時間的広がりのない点として捉える。進行相はできごとが完了に向けて進行中であるか、あるいは同じ動作が繰り返して行われていることを表す。完了相はできごとが完了したことを表す。まずは現在時制の例を見てみよう。

(48-a) He eats breakfast.

(48-b) He is eating breakfast.

(48-c) He has eaten breakfast.

(48-a) は、食べるという行為の内的構成を見るというよりは、そのできごとが起きることだけを言う。いわば無相である。行為の性質上、現在時制では習慣の読みがもっとも自然だ。(48-b) では、朝食を食べ終わる時点に向けて行為が現在進行中である。目的語がなく単に He is eating ならば、終わりの時点は特に想定されておらず、食べる行為が連続している。(48-c) では朝食を食べ終わっているが、食べ終わった直後か、いずれにせよまだ午前中である。また何かを食べたら「さっき食べたのに」と言われそうだ。

過去時制はこうなる。

(49-a) He ate breakfast.

(49-b) He was eating breakfast.

(49-c) He had eaten breakfast when I called on him.

(49-a) He ate breakfast は現在時制の文と違って習慣の意味を表さず、過去時制の意味を反映して、過去の特定の時間に1回食べたことを表す。あとの2文は説明を省略する。

英語の相の形式は一定であるが、意味は動詞によって変異する。厳密には個々の動詞によって相の意味は変異するが、ヴェンドラー (Z. Vendler) の提唱した状態動詞、活動動詞、到達動詞、達成動詞という4種類の動詞アスペクト類に応じて大まかな一般化ができる。

表4 英語の語彙的相 (現在時制の意味/過去時制の意味)

	状態動詞	活動動詞	到達動詞	達成動詞
(例)	know, like, resemble	eat, swim	reach, die, find	eat breakfast, mow the lawn
単純相	事態が連続	習慣//1回	×//事態が成立	×//事態が成立
進行相	×	事態が成立・連続	事態が未成立	事態が未成立
完了相	今までの連続した事態// ある時までの連続した事態	事態が完了	事態が成立	事態が成立

英語と日本語を比較対照する上で示唆的なのは進行相である。英語の進行相は、活動動詞では動作の繰り返しを、到達動詞と達成動詞では事態の成立に向かう状態変化を表す。状態動詞は通常は進行相にならないが、He is resembling his father each year. (彼は年々父親に似てくる) など、状態変化を表す文ならば許容される。

進行相に関して特に興味深いのは、reach, die, find, recognize など到達動詞である。

(50) We are reaching the summit at any time.

(51) John is dying.

これらの文で、登頂する、死ぬ、という事態は未成立である。進行相はその名の通り、事態成立に向けての進行を表すのだ。

達成動詞の場合も，進行相は事態の未成立を表す。

(52-a) He was mowing the lawn (when I saw him this morning).

ちなみに，過去時制の単純相の場合は通常，事態の成立を表すが，よく知られたヴェンドラーの in/for テストで事態の成立・未成立を明示することもできる。次の (52-b) では，芝生を刈るという行為は完了しているが，(52-c) では完了していない。

(52-b) He mowed the lawn (in an hour).

(52-c) He mowed the lawn for an hour.

英語の到達動詞と達成動詞の進行相は，英語の特徴を物語っている。英語は時間を直線的な経験として捉え，事態が終点に向かって進行するという見方をする。

### 3.2. 日本語の相

日本語では相の形式は重複を示し，時制の形式とも絡んでやや複雑である。本稿では，表 5 の通り日本語の現在時制には単純相，完了相，継続相があり，過去時制には単純相と継続相のみがあると考えられる。なお動詞の語彙的意味や態が関連すると思われる変異形「してみる」「しておく」等は「する」で代表し，「してある」は「している」で代表する。

表 5 日本語の相

	現在時制	過去時制
単純相	する	した
完了相	した	×
継続相	している	していた

単純相は（後述の主観動詞を除いては）英語と同様に，できごとを時間的広がりのない点として捉える。発話行為の遂行動詞を現在時制単純相で表すのも英語と同様だ。完了相はできごとが完了したことを表す。継続相は完了した結果が継続していることを表す。まずは現在時制の例を見てみよう。

(53-a) 彼は朝食をとる

(53-b) 彼は朝食をとった

(53-c) 彼は朝食をとっている

(53-a) は英語と同様に無相であり，現在時制では習慣の読みがもっとも自然だ。(53-b) では，朝食を食べ終わっている。英語と違って，まだ午前中かどうかは不明だ。(53-b) は過去時制かどうか曖昧だが，「もう」という副詞を伴う次の文(54)は，否定形が現在時制に限定されることから現在時制の完了相と見るべきだ。この文は完了を問うているため，完了相で肯定して「とった」と答えるか，あるいは未完了の状態が継続していることを否定形で表して「とっていない」と答えるのが正しい。

(54) もう朝食をとったか——とった/とっていない/\*とらなかった/\*とる/?とっている

(53-c) では，彼は朝食をとっている最中か，あるいはすでに朝食を済ませている。先に時制のところで，日本語では過去時制が現在時制の「している」形に容易にシフトすると述べたが，この(53-c)の「すでに済ませた」という読みの方がそれである。

「している」形は，現在時制の継続相と呼ぶのが当たっている。「食事をとっている最中」の読みが現在のできごとの継続を表すのは当然だが，「すでに済ませた」の読みもできごとの結果が現在まで継続していることを表すからである。こちらの例を見てみよう。

(55) 彼は(昨年)大学を卒業している

(56) 彼は東京オリンピックに出ている

それぞれの文の後に「そして就職した」「その後で国内の大会にもたくさん出場した」などと続けることができる。過去のできごとが決して幕引きされることなく現在にもち越され，主語の特徴となっている。いわば現在が過去を取り込んでいる。

以上の理由で，日本語の現在時制に「単純相」「完了相」「継続相」という3つの相を設定する。このうち「完了相」は過去時制には存在しない。

次の例は過去時制である。

(57-a) 彼は(昨日)朝食をとった

(57-b) 彼は朝食をとっていた

(57-c) 私が訪ねた時，彼はすでに朝食をとっていた

(57-a) は単純相で、過去に朝食をとったことを表す。あとの 2 文は継続相である。このうち (57-b) は過去のある時に食事中だったのか、その時まですでに済ませていたのか曖昧だ。(57-c) は文脈から、すでに済ませたという結果の継続であると分かる。英語では進行相と完了相が分業するため、曖昧さを回避できるが、日本語では曖昧さが生じる。

彼は朝食をとっている = He is eating/ has eaten/ ate breakfast.

彼は朝食をとっていた = He was eating/ had eaten breakfast.

ここまでのところで、日本語の時制・相の 2 大特徴が浮き彫りになっている。

主観動詞以外では、

1. 過去時制単純相「した」と現在時制完了相「した」が同形である
2. 過去時制単純相「した」と現在時制継続相「している」が交換可能である

明らかに、日本語の過去時制は弱い概念である。対照的に、現在時制は豊かな相をもっている。現在時制の相は強い概念だ。

さて、表 5 が示すように日本語の相の形式は一定であるが、意味は動詞によって変異する。厳密には個々の動詞によって相の意味は変異するが、アスペクトに基づいて動詞を分類することで、ある程度の一般化が可能になる。本稿では主観動詞、持続動詞、瞬間動詞の区別を提案する。

主観動詞は「ドキドキする」「分かる」「困る」などで、単純相が決して無相ではなく、継続相と同様に事態の成立を表すのが特徴である。動詞によって用法が変異し、例えば「ドキドキする」は完了相では使わない、「困る」の主語は自分で、「困っている」の主語は他人でもよい、などから、主観動詞はさらに細分化しそうであるが、本稿では追求しない。

(58) なんだかドキドキする (= なんだかドキドキしている)

(59) それは困ります

持続動詞は「食べる」「オリンピックに出る」など、幅のある時間を必要とする。持続動詞の継続相は、行為の連続か、あるいは結果状態の継続かで曖昧である。

(60) 彼は今、アメリカに行っている

(61) 彼は二度アメリカに行っている

「絵を描く」などは持続動詞に当たり、英語の達成動詞 *paint a picture* とは相の意味に関して異なっている。

(62) 彼は1時間、絵を描いた

(63) He painted pictures/ ? a picture/\*the picture for an hour.

日本語では、目的語が特定か不特定かを表す必要がない。この点は英語との大きな違いだ。特定の絵を完成に向けて1時間描いた場合でも、「1時間絵を描いた」で構わない。

助詞「で」を加えて「1時間で絵を描いた」とすれば、絵は完成している。このように日本語では、動詞自体は持続を表すのみで、動詞の周辺の要素に助けられて相の意味が確定する。英語で *paint pictures* は活動動詞、*paint a/the picture* は達成動詞と分類され、異なった語彙的相をもつのと対照的である。

この違いは、英語で数が文法化され、冠詞が特定性に関する情報を組み込んでいるのに対して、日本語はそうでないことと関連する。英語の *paint a/the picture* では、絵という個体が空間上の終点をもつため、その絵を描くという行為の時間上の終点が自ずと決まる。個体に関心を向けられない日本語ではそういうことがなく、行為は持続する。

最後に、「卒業する」など瞬間動詞は英語の到達動詞に対応する。しかし英語の場合と違って、日本語の瞬間動詞の継続相は、完了したできごとの継続を表す。次の「登頂する」「死ぬ」はその例である。

(64) 彼はエヴェレストに登頂している

(65) 彼は(1980年に)亡くなっている

英語の到達動詞を使った先の (50) *We are reaching the summit at any time.*あるいは (51) *John is dying.* が事態の未成立を表したのと対照的に、日本語の「登頂している」「亡くなっている」では事態がすでに成立している。

表 6 日本語の語彙的相 (現在時制の意味//過去時制の意味)

	主観動詞	持続動詞	瞬間動詞
(例)	分かる, 困る	食べる, 家を建てる	着く, 死ぬ
単純相	態が成立	習慣//1回の成立	×//成立
完了相	成立//×	完了//×	成立//×
継続相	事態が連続	現在の連続または過去からの継続// 過去の連続または以前からの継続	過去からの継続// 以前からの継続

### 3.3. 日本語の「瞬間構文」

ここまで、日本語の形式的相と語彙的相を概観した。最後に、日本語の性質をよく反映すると思われる独特の構文について述べる。現在時制の完了相を使った構文である。

(66-a) あった.

(67-a) 来た.

(68-a) (よし, ) 買った.

(69-a) 決めた.

(70-a) やめた.

何かを探していて、ついに見つけた時、「あった。」と言う。待っていた人の姿がついに見えたり、物が運ばれてきた時、「来た」と叫ぶ。よくあることだ。迷った末に決心して「買った」「決めた」「やめた」とも言う。これらの表現は現在時制である。その証拠に次のように続けることができる。

(66-b) あった。ついに見つけました。今そちらにもって行きます。

(67-b) 来た！さあ、道をあけて通してやって下さい。

(68-b) 買った。あのう、済みません、これください。

(69-b) 決めた。これにします。

(70-b) やめた。もういいから帰ろう。

これらの文では通常、主語が省略される。主語は「私」とは限らず、文脈から明らかな旧情報、トピック、である。話者は最大級の共感を込めて主語を省略し、この短い動詞文に過去の

経緯を暗示させる（主語省略と共感については宗宮・下地（2004）を参照されたい）。

これらの文では通常、目的語も省略される。目的語は主語と同様、文脈から明らかであり、言う必要がない。話者はできごとの成否だけに注目する。

これらは話者が自分に向けて発した文だ。ていねいな「です・ます」体にはならず、状態的な「である」体でもなく、いわば「た」体で表現される。その後で他人に向けて体裁を整えた文を改めて発することが多い。

このような現在の瞬間の変化は、「彼はもう朝食をとった」などと同じように現在時制完了相で表されるが、上のような文脈上の制約をもった有標な構文を必要とする。本稿ではこれを「瞬間構文」と呼ぶ。瞬間構文では話者が、当該のできごとをごく近距離から眺めている。だから現在時制でなければならない。

この瞬間構文と、先に述べた弱い過去時制、主観動詞、達成に向かわない持続動詞、過去を取りこんだ瞬間動詞の継続相は、日本語の本質を物語っている。日本語は、話者のいる時間の中でできごとが起き、あるいは事態が連続しているという見方をする。時間は客観世界を直線的に流れるというよりは、話者のいる現在の空間の内側を漂う。

#### 4. 英語と日本語の世界

英語と日本語の時制と相を観察した結果、英語にも日本語にも時制と相は存在するが、その意味つまり時制と相が文法体系内で果たす役割は大きく違っていることが分かった。その違いは、両言語の本質、すなわち両言語が内蔵する世界観の違いでもある。

英語では、話者の視点が発話時から動かず、主節のみでなく従属節の中まで見通す。発話時を起点とする直線が時間を貫いてできごとを描写する形だ。話者は常に発話時にいるため、主節が過去時制の時には従属節の時制までは見通しがきかず、やや曖昧になる（そのことは、法助動詞が導入する認識世界の時制についても言える）。

さらに英語では通常、事態が成立・完了に向けて進行する。つまり時間は過去から未来へと流れるものとして捉えられる。

この直線と進行という二つの特徴は英語に顕著であり、SVO 構文が表す因果関係にも、空間前置詞が表す「道を歩く」経験にも認められる（宗宮・下地（2004）、宗宮（2005））。英文法の中で、一見無関連なこれらの領域で観察されるこの二つの特徴は、「因果関係」としてまとめることができる。過去から未来へと流れる時間の中で、原因が結果に先行し、原因が結果を生むという関係である。英語の時制と相も、これを表している。

英語は人間のさまざまな経験のうち、直線として理解できる経験を文法に取り込む傾向があると見える。英語が表す世界は、ダイナミックに未来に向けて進む世界である。



日本語では、話者の視線は主節の範囲に限定され、従属節には及ばない。従属節の動詞は主節の動詞との相対的な前後関係で「時制」を与えられる。主節動詞が過去時制である時には、話者の視点が発話時から離れて過去に飛ぶ。そして主節と従属節のできごとを近距離から見て、前後関係を決めるのだ。二つのできごとは現実の時間軸を離れた話者の心的な空間でパッチワークのように並べられる。

日本語ではまた、現在の状態を過去のできごとの結果として見る傾向が強い。その場合には、すでに成立した過去の事態が現在に重なっている。日本語の世界は過去を引きずり、過去と一体化した現在を描出する。ここでは過去が話者のいる現在へ飛んでくる形だ。

話者が近視眼的であること、話者の視線が発話時に固定していないこと、現在時制の相が豊かであることは、一つの同じ特徴の表れである。すなわち、日本語では話者が常に近距離からできごとを眺めているのだ。話者とできごとの距離が最小になり、話者の共感が最大になった時には「あった」「決めた」など瞬間構文が使えることも見た。

この、心的空間と話者の共感という特徴は日本語に顕著であり、格助詞が表す人間関係にも、文字体系が表す身内とソトの関係にも認められる(宗宮・下地(2004)、宗宮(2005))。

日本語文法の中で、一見無関連なこれらの領域で観察されるこの二つの特徴は、「自己の相対化」としてまとめることができる。話者は、事態を構成する要素のうち、どれかに自分を重ね合わせて、客観世界を心的空間に移しかえる。この話者の存在感は、時制と相からも窺える。日本語では客観的な時間の流れは重要ではない。だから時制は弱い概念なのだ。

言い換えれば、日本語は世の中のさまざまな事態や成り行きの中で、常に自分の位置を確認するという経験を文法に取り込んでいる。日本語が表す世界は、主観的で状态的だ

以上、本稿では英語と日本語の時制と相を観察して、それぞれの言語の性質の違いが時制と相にも反映していることを観察した。

#### 参考文献

- Androutsopoulos, Ion. 2002. *Exploring Time, Tense and Aspect in Natural Language Database Interfaces*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Co.
- Binnick, Robert I. 1991. *Time and the Verb*. Oxford: Oxford University Press.
- Comrie, Bernard. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University.
- \_\_\_\_\_. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University.
- Declerck, Renaat. 1991. *Tense in English*. London: Routledge.
- Dixon, R. M. W. 1991/2005. *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』  
ひつじ書房
- 国立国語研究所 1985. 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版

- Leech, Geoffrey N. 1971. *Meaning and the English Verb*. New York: Longman.
- Palmer, F. R. 1968. *A Linguistic Study of the English Verb*. Coral Gables, Florida: University of Miami Press.
- \_\_\_\_\_. 1965/1987. *The English Verb*. New York: Longman.
- Perkins, Michael R. 1983. *Modal Expressions in English*. London: Frances Pinter (Publishers) Limited.
- Reichenbach, Hans. 1947/2005. "The Tenses of Verbs," section 51 of *Elements of Symbolic Logic*, in Mani Inderjeet, et al. (eds.), *The Language of Time*. Oxford: Oxford University Press, 71-78.
- 宗宮喜代子 2005 「指示の意味論（序説）—日英対照言語学—」『東京外国語大学論集』第 71 号: 1-22
- 宗宮喜代子・下地理則 2004 「英語と日本語の「主語・目的語」構文について」『東京外国語大学論集』第 69 号: 1-25
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics and Philosophy*. New York: Cornell University Press.

## Tense and Aspect in English and Japanese

SOHMIYA Kiyoko

The aim of this article is to illustrate how the different grammatical functions of tense and aspect in English and Japanese reflect the different worldviews that are encoded in these languages.

Although all humans experience time, individual human languages express it differently. English has two tenses: present and past. It has three aspects: simple, progressive, and perfective. It views time as a linear progress of states and events from the past to the future.

Another salient feature of English is that the speech time always functions as the reference time; i.e. the speaker stays where he is in the real world. This explains why the time relation sometimes becomes ambiguous in the reported speech and in the judgment sentence. The speaker cannot see well when an event belongs to an unreal world: the past and the epistemic.

Japanese has two tenses: present and past. The present tense has three aspects: simple, perfective, and stative. The past tense has two aspects: simple and stative. The present tense has a rich variety of aspects, depending on the aspectual classes of verbs, whereas the past tense is a weak concept that easily shifts into the present stative.

In Japanese the speech time does not always serve as the reference time. The speaker tends to move to the vicinity of the event, whether it is in the present or in the past. This is why in the phenomenon of Japanese relative tense the time relation totally ignores the speech time. Time does not progress from the past to the future, but flows back and forth in the speaker's field of view.

These characteristics of English and Japanese tense and aspect support my thesis (Sohmiya 2004, 2005) that English tends to encode the objective cause-effect relation into the grammar, whereas Japanese values the speaker's subjectivity and tends to grammaticalize his position relative to other elements in a state of affairs.